共同体情報・1

われらが4人の

フランス共同体

岡田俊雄
19 MARC-LA-TOUR, FRANCE

現在私は南フランスにおいて、数々の仲間たちと共に協同農場を作り、そこで生活しています。ここでは、なぜ私が現在フランスにおいて農場を行なうようになったのかということと、私たちの小さな農場の様子について書いていくことにします。

私は五～六年以前から、現代日本の経済機構と機械文明社会が、私達の人間性を無視したものであることを強く感じ、このような社会をより人間にとって住みやすく、お互に尊重しあうことのできるようなものにするにはどうしたらいいのかと強く考えつづけていました。

そんなある日、イスラエルにキブツと呼ばれるユートピア的共同村があることを発見しました。その社会生活の形態は私の理想とする社会と全く同じであったため、強く興味を引かれ、ぜひこの社会をこの眼で見、肌を通して確かめたいと思ったのです。

そして今から四年前、日本人の仲間とともにキブツへ行き、一年間程グループで滞在しました。キブツで私は、メンバーと共に生活し、共に労働し、共に話し合いました。若者たちにはキブツの問題点、将来の考え方などを尋ね、議論しあい、やがてキブツ社会の発展に強く確信を持つに至りました。

しかし、一年間の同一キブツでの滞在だけでは、私のキブツ理解は十分なものではありませんでした。そこでグループ解散後は一人になって他のキブツへ行き、そこでさらに一年ほどすごしました。

ここでは私の焦点をキブツの若者たちにもういちど絞りました。現在、日本を始めとして、農家の若者が農業への関心を失ない、農業を捨て都市に集中化していく傾向が世界的にあります。そうしたなかで、私の出合ったキブツの若者たちの大部分は、将来もキブツに残って農業を続けていくと自信をもって語っていたのです。

そしていつの日か、私自身もこの様な社会を作りたいと思うようになりました。

このように、キブツについて調べているとき、私はフランスからの二人の青年と出合いました。彼らも又、私と同じような対象に興味を示したので、その後、私たちは共同してキブツの研究を行ないました。私とは別な環境から来て、しかも同じようにキブツに関心のある人々と話し合う機会を得ることによって、より深くキブツを理解できるようになったと思います。

この時私達は、キブツの生活システムと精神とを取り入れた新しい社会を私達自身の手でいつの日か作ろうと約束したのです。そして二年程前から私達は、フランスで共同生活をしながら農場を作る計画を立て、そのための努力をしてきました。その結果、私達は南フランスの地に五〇ヘクタールの空農場を見つけることができ、資本金約百万で牧畜を中心にオープンした次第です。

御多分にもれずフランスにおいても、若者が農業を嫌い都市へ出ていくことが非常に多いため、廃農する人々もでてきているわけで、私達の見つけた農場もこうした農場のひとつでした。しかし一方において、都市での生活を嫌って逆に農業を志向する若者の増加する傾向もいくらかではあるが見うけられることも、つけ加えておく必要があるでしょう。

それでは私たちの農場のことを書くことにしましょう。

私達の農場は、パリから南へ五〇〇キロほどのところにあるチュウルという町の近くにあります。ここは、マセフ・セントラルと呼ばれるフランスの中央山脈のなかに位置し、川と湖と山のある大変に美しい地方です。農場は高さ五〇〇メートルの丘のうえにあって夏はパリよりずっと涼しく、冬にはたくさんの雪が降るところでもあります。

家畜は、現在羊五〇頭、ヤギ三〇頭、アヒル一〇〇羽、ウサギ一〇〇匹、ニワトリ二〇羽と、まだまだ小さな農場です。羊は食肉用、ヤギは乳からチーズを作り、アヒル、ウサギは食肉用となっています。この夏までには、羊を二〇〇頭にふやす計画でいます。私たちの飼育方法の変わっている点は、アヒル、ニワトリ等を草原に放し飼いにする事により、えさ代を室内飼いの三分の一以下にしていることですが、この方法をこれからウサギにもためしてみるつもりです。

私達の仲間を紹介しておきましょう。ブルーノ（二五才。専門、羊および野菜畑）、ミッシェル（二五才。専門、外交および冬の間六ヶ月間アフリカにて猟のガイド）、クリスチャンヌ（二一才。ミッシェルのフィアンセ。専門、家事およびニワトリ、野菜畑。彼女も冬の間ミッシェルといっしょにアフリカへ資金かせぎに行く）、そして私（専門、ウサギ、アヒルおよび機械すべての整備と管理）。

現在私達のあげる収入はすべて農場拡張資金にまわされますが、私達は若いので一ヶ月に一度は旅行、映画などに行くし、夏は大きな旅行もします。

将来は、イスラエルのモシャブシトフィ的な社会をめざします。各部門からの収入はすべてひとつにし、農場拡張資金をのぞいて全員に平等に分けられるようにします。

簡単なスケッチですが、これが私達の作ったフランス共同農場です。

共同体情報・2

山岸会の印象と私の抱負

MARIUS DIAZ
%MR, ANDREW SIOCHI P.O.B 744, MANILA, PHILIPPINES

フィリピンの青年マリウス・ディアズ（二七才）と我々は、イスラエルのキブツで知りあった。その後、彼は数ヶ国を旅行して今年の二月に来日し、山岸会本部で日本の共同体の生活体験をした。このインタビューは、彼がマニラに立つ日、協会の事務所で行なわれたもので、彼の山岸会での印象や今後の抱負について語ってもらった。

× ×

Q：まずはじめに、山岸会での生活について聞かせてほしい。

A：二月に来日してから四ヶ月間、ずっと山岸会にいた。一燈園にも行きたかった

んだけれど、一ヶ月も病気をしてしまったため結局行けなかった。

はじめは新しい鶏舎を作る仕事を、オランダ人のフィリップなどといっしょにした。ここで二週間位働らいて、そのあとで鶏舎で働らいたけれど、それから病気になってしまった。このはじめのころの仕事は、ぼくにとってちょっときつかったし、医者もそれが病気の原因だろうといっていた。そのあとは、もっと簡単な仕事についた方がいいだろうということになって、ビニールハウスで軽作業に従事した。

食事は、特に最初のころなじめなかったし、一日に二度というのもつらかった。他の人の食べているものをほとんど食べられなかったので、トーストを作ってもらったりしたけれど、このことも健康を害したことの理由かもしれないな。

Q：君の他に外国人はいたの？

A：さっき言ったフィリップの他に、スウェーデンのベン・アレキソンという男がいた。SCIの人間で、金峰トレーニング・センターで働いたあと春日に来て、それから一週間ほど豊里実顕地へ行き、もう一度春日に戻ってきて我々といっしょに特講を受けて、一燈園の方へ行った。今も一燈園だと思う。

Q：じゃあ、英語の特講があったの？

A：いや、そうじゃなくて、普通の日本語の特講だった。外国人で参加したのは、フィリップとベンとぼくの三人だけで、豊里から通訳の人が来てくれて、我々の意見を訳してくれたり、又彼らの話し合いの内容を英語に直してくれたりした。

Q：それで、特講の理論を理解できたと思う？

A：うん、大筋は理解できたと思っている。間接的に英語で行なわれたこと自体にいろいろな限界はあったけれど、それにもかかわらず根本的なことについては完全にではないが得ることができた。それに、特講の前に山岸会の英語のできる人たちが、親切にいろいろと説明してくれた。

Q：山岸会の青年たちとコミュニケイトする機会はあった？

A：彼らの大部分が英語を少し話したので、仕事を通していろいろな青年と意見を交わすことができた。

Q：では、山岸会全体に対する君の印象はどうだったのだろうか。

A：ぼくはキブツを出たあと、すぐにフランスに行って小さな村ですごした。そこではかなり自由な時間があったので、キブツでの体験をもとにして、フィリピンではどんなコミューンを作ったらいいのかといったことについて考え、それをノートしていた。そして今回、山岸会で生活してみて、ぼくがノートしておいたプランとかなり共通のものがあることを感じた。ぼくの山岸会理解は十分なものではないかもしれないが、その精神は、私が作りたいと思っているものと似たものではないかと思う。

Q：ということは、君はフィリピンでコミューンを作りたいということなのか？

A：そうだ。フィリピンでコミューンを作ることが、ぼくが日本へ来たことの目的だし、同時にキブツへ行ったことの目的でもある。アメリカでも宗教コミューンやヒッピーのコミューンへ行ったけれど、それらは我々の問題を解決するものではないと思う。

Q：フィリピンでは、君といっしょにコミューンを作っていこうとする仲間はいるの？

A：二〇人程学生仲間がいる。ぼく自身は、一応学校に籍はおいているけれども、もう戻らないつもりだけどね。そのうちの二人が今、キブツ・ヤグールに行っている。彼らは多分、この九月に帰ってくるんだけど、そのあとで我々はもっと具体的なプランを検討するつもりだ。以前、ぼくはコミューンについて今とは別な意見を持っていたけれども、キブツに行き、山岸会を見たあと、その考えもかわったので、フィリピンに戻ったらすぐに、そういった点についてもみんなと議論しなければならない。

Q：どんなスタイルのコミューンを作りたいの？　農業を中心にしたコミューンなのか都市との関連をもったコミューンなのか。

A：基本的には、まず最初に農業で始めることになると思う。だけどそのことは、我々が農業にとどまっていなければならぬということを意味するのではない。ぼくの希望は、可能ならば国家的なレベルで、我々の思想を拡げていくことなのだから。

Q：フィリピンには、我々のような協会だとかコミューンがありますか？

A：ないと言えると思う。モシャブのようなタイプの村があるけれども、それは政府の計画だ。その他には宗教的なセクトに属するものもある。

Q：フィリピンからはキブツに行っている青年はほとんどいないと思うが……。

A：ほとんど行っていない。第一にキブツ自体が、フィリピンではほとんど知られていない。コミューンの考え方自体が、フィリピンでは新しいものなのだ。我々の国は現在でも非常にアメリカの影響が強く、一般的にコミュニズムに対しては反感が支配的で、我々がコミューンを作りたいといえば彼らはすぐにそれをコミュニズムと結びつけて、なかなか理解されないだろうと思う。学生の中には、コミューンの思想に共鳴する者が多くいるだろうが、彼らが経済的にも独立するようになれば我々も多くの仲間を得ることができるかもしれない。

Q：そんな状態のなかで君自身は、どのようにしてキブツの存在を知ったのか？

A：ぼくは以前からコミューンの勉強をつづけていたので、本のなかからキブツを知った。そして、まず実地に経験することが必要だと思った。そしてこの経験を土台にして、もういちど仲間と話し合いをすることにしたわけだ。そしてイスラエルへ行き、むこうで日本協同体協会の存在を知り、日本へ行く決心をした。

Q：君のこの間の体験をまとめてみる気持はないのだろうか？

A：小さな本を書くことを計画している。どんなコミューンがフィリピンで適しているのか、というぼくの考えをまとめてみたい。そのためには、もう一度キブツへ行くか、フランスへ行くかして執筆のための時間を確保したい。今回は病気になってしまったため、とにかくフィリピンに帰らなければならなくなったけど、フィリピンで何か書けるとは思えないんだ。国ではすぐに動きだすことを強いられてしまうだろう。とにかく、ぼくは今、まず第一に何か書くことが必要だと思っているので、そのためにぼく自身の自由な時間を確保することが必要だ。だから、病気が直り次第すぐに、イスラエルかフランスに行きたい。

Q：今後、我々との接触は可能だろうか。

A：山岸会での経験を経たあと、ぼくはできたらフィリピンの学生をこちらへ送ることができたらと考えている。フィリピンからイスラエルまでは遠いし、それに、山岸会の方に我々のアイデアに近いものがあるような気がするし。とにかく今後とも、この協会との連絡を取りつづけていきたい。

共同体情報・3

あたらしき我が家 北試の印象

AVRAHAM BEN-YOSEF
北海道野付郡別海町パイロットファーム　ヤマギシズム北海道試験場内

A・ベンヨセフ氏は一九一七年イギリス生まれ。五五才。一九五〇年十一月イスラエルに移民し、いくつかのキブツをまわった後、五五年四月キブツ・ササに入り、一年半後に正式のメンバーとなる。以後七一年十二月にイスラエルを去るまで一六年間、ササのメンバーとして過す。主に牛小屋で労働。七二年四月、来日。現在北試に在住。日本の共同体のメンバーとなることを希望している最初の外国人といえよう。

主な著書に『世界で最も純粋な民主主義』『古代の歴史』（いずれもアメリカで出版）がある。

× × ×

草刈教授の大変に親切であたたかなアレンジによって、美しい日本の各地を一ヶ月にわたって旅行したあと、北試に到着しました。ここに着いてまだ一週間にしかならないので、何か書きはじめるのは早すぎるかもしれませんが、北試の最初の印象をのべることはできるでしょう。

ここはなんとチャーミングな小さなキブツでしょう。まさにキブツのミニチュアといいましょうか。

牛を中心にして、ここでは野菜、たまごを供給できます。施設としては、子供の家（全部で二〇人位しかいませんが、年のちがった子供たちがみんないっしょに生活している）、洗たく場、衣料所、新しい食堂（私の来るわずか一〇日前にできあがったもの）などがあります。ふたつの大きな牛小屋も含めて、全部で五つの建物が牛のためにあてられ、その他にメンバーの住宅や私の部屋等が半キロにわたって点在しています。――これが一〇〇人の人々の住むキブツのすべてです。

私は特にここの景色が気に入っています。私はもともとはイングランドからイスラエルへ移民した人間ですが、うねうねとした牧草地のつづくこの景色は私の第一の故郷であるイングランド東南地方のエセックスに非常によくにているのです。

イスラエルで、私は美しい山に住んでいました。でも、それらは私にとって、広い空のみわたせる平原のように親しみ深いものではないのです。ですから私は、開放的で平和な、遠くにすばらしい山々のみわたせる地方へもどってきたことをとてもよろこんでいます。

メンバーたちも又、自然と同様にイスラエルの人々に比較すると平和的です。イスラエル人というのは、非常な緊張下に生活し、かつ騒がしいものですから。ですから、その雰囲気を比較すると、北試には本当に平和があります。牛でも、けったりする危険なイスラエルのものよりも、ここの牛はずっと静かです。ここでは、人々は牛を愛し、すべての関係はすばらしいものです。

だが私はまだ、なぜ彼らが一日の大部分の時間を労働し、文化的活動を行おうとしないのかという理由を理解できないでいます。イスラエルのキブツにおいては、朝も晩もミルクをしぼらなければならないような牛飼いはいません。彼らの労働時間は適度な長さに保たれているのです。北試においては、まだ機械化が十分に発達しておらず、多くの時間、

多くのメンバーを投入しなければならないということもたしかなのですが。

ただ私は、読書や話し合いのためにもっと多くの時間を必要としている若い人々のことを心配しているのです。もしも彼らが、社会、経済、哲学、歴史、文学その他についての全般的な公平な知識をもたなければ、少くともある部分においてヤマギシズムはむしろ限界をもつものとなるでしょう。もし彼らがいつも夜の九時には眠らなければならず、朝五時までには働きに出なければならないというのなら、日中の長い休息の時間にでも、こうしたことを得ることはできるはずです。

私自身は山岸会の英語のエキスパートである松村光子さんの大変貴重な助力を得て、よろこんでいます。

私は、日本のキブツ運動のなかでメンバーになりたいと思っている最初の日本人だということですが、できるだけ早く日本語を習って、本当にメンバーとなることを望んでいます。

とにかくすでに私は、この美しい自然の環境のなかで、私をよく助けてくれる友情のあついメンバーとともに、北試を私の平和な新しい家として考えているのです。

共同体情報・4

ブラジルコミューンへの第一歩

前田英雄
C,POSTAL 67, BOTUCATU, E.F.S. ESTADA S.PAULO, BRASIL

1

前略。サントス港に上陸して、こちらに入殖してから一〇日ほどたちました。少しは土地の様子も判明してきましたのでお知らせします。

昨日、ボッカツ市警察へ外人登録に行きましたが、この市は一〇〇年程前にコーヒーの集散地として発展した町で、道路はすべて石で敷きつめられています。今は学園都市として発展しています。女の子ばかりの孤児院があって、部屋が余っているので学生を下宿させています。

町まで七キロあり日本人は自動車で行きますが、日本で五万円位の車が七〇万円位します。町までは一日二往復、オンボロバスが通っています。どこでも止まってどこでも乗せてくれます。

ブラジル人の農家の人が馬や馬車にのって町にやってきます。腰にピストルはさしていませんが、ところによっては西部劇にでてくる町のようなところもあります。

ボッカツ市よりサンパウロ行の高速バスがでています。午前一時発のにのってサンパウロ市へ行ってみました。出発して一〇分位たつとジュースとサンドウィッチをくれます。それがすむと枕をくばって車内を暗くします。便所の電気のみがついていました。午前四時半にサンパウロ市に着きました。ターミナルには各国語を話せる人がいて、それぞれの言葉で旅行者の世話をやいてくれます。

当地は今、秋の最中です。秋の最中とはいっても、別にモミジが紅葉しているわけではありません。気温は朝一七度、日中二〇度位です。夜中にはふとんをきます。夜天には星が降るごとく光り、南十字星が天ノ川にかかってロマンチックです。朝早くから種々の小鳥が鳴きます。この小鳥のおかげで、当地の果実は日本ほど殺虫消毒剤を撒布せずにすむそうです。

今、栗が二回目の収穫期ですが、これは自家用程度で出荷するほどありません。ビワの袋かけがはじまります。トマトが出荷しかかりました。

私達は、今のところ倉庫を改造して入っていますが、ふつうの農家の住宅は全部煉瓦造りで、そのうえ石灰を塗り屋根は赤色です。

私達の事業計画は、今年の九～十一月頃までに住宅、鶏舎の建設を完了して、ヒヨコを試験に二〇〇〇羽位入れてみる予定です。

とにかく、私達、ことばが判らないので不自由ですが、会話帳片手にどうやら事がはこびます。この附近は日本人が少ないので、皆ブラジル語が上手なようです。

鶏がいま、群をなして私の目の前をはしりぬけていきました。余り数が多いのでうるさいほどです。

又便りします。皆様元気でがんばって下さい。

2

今、私たちの植民地サンタマリヤ（開拓地の事を現地の日本人は植民地と呼びます）は、桃の花盛りです。今年は異常天候にて、花の盛りも二〇度位の気温が今年は一五度あります。

七月の下旬から桃の袋掛けが始まります。今、家内と娘が袋張りをしています。五〇〇本の桃の木で約四五万枚の袋が入用です。女二人で、一日約一万枚近く張ります。男、つまり私と息子の定雄は、ブラジル産の山の芋を一〇〇〇株植え付けるための場所をこしらえています。

この植民地の当初の計画として桃を主農産品とする予定で一家族五〇〇～一〇〇〇本は植えてあります。この程度で、二五〇万から五〇〇万円位の粗収入があります。

開拓当初は桃の苗木を植付けてから、収入があがるまで約三年はかかりますので、その間の生活費を蔬菜栽培、養鶏等に求めたのですが、この植民地は土地質が砂質壌土であるうえに湧水が多くその上気候が高原のそれであり、又近くに日本人の植民地がないため、卵、野菜はできるとすぐ、待っていたかのように売れたそうです。

それまでは遠くサンパウロ市より運んでいた野菜が、新鮮なまま手に入るようになり、人々から非常に喜こばれ、それがために桃が従となって今では野菜、卵が主の人達もいます。野菜を多く作る人は、現住民を毎日三～五名使用しています。

私たちは、人さえそろえば、養鶏、牛乳、果樹、養豚、野菜と行なう予定ですが、今のところは桃と養鶏と自家用野菜を主にします。

私たちの植民地は、日本青年協会在ブラジル会員の吉岡省氏が、日本青年協会からの希望により同植民地を四〇家族位の予定で開拓すべく計画されました。現在は、私達山岸会関係の三家族を加えて二二家族です。土地はまだ半分程遊んでおり、使用されておりません。家族の構成は日本人の他には、ドイツ一家族、ブラジル一家族、台湾二家族となっています。

私たちは一流一派にこだわらず、だれとでも一体生活を目指したいと思います。『月刊キブツ』愛読者の方で、ブラジルにおける共同体による農業生活希望者がありましたら、御連絡下さい。新しき村、一燈園、心境農産等からの参加も呼びかけてみてください。当方はこれから建設に入りますが、受入れ態勢は出来ています。

貴協会の御発展を祈ります。

共同体情報・5

「備北共同体」の私的まとめ

今井真治
岡山県阿哲郡神郷町油野　備北開拓

五月上旬に、ぼくは「備北共同体」のメンバーから脱け出しました。百姓仕事にかこつけて、きょうまで、ぼく自身の反省と教訓をまとめてみる機会をもたないまま、仕事の合い間に断片的に考えてみるだけでした。

久しぶりに岡山の街におりて、頭の整理のついたこの機会に、ぼく自身の偏見と誤解を含んでいることを前提として、文章をまとめて、みんなの前に公表することにします。

率直なところ、ぼく自身の自己保身の姿勢が、こんどの事態を招いたと思っています。「二十四時間革命」としての共同体運動に、現在のぼくは耐えきれなかったといえると思います。去年のワークキャンプや今年にはいってのここでの共同生活は、ぼくにかつての大学闘争でのバリケードの中のことを思い出させました。毎日の百姓仕事の上に、運動としての緊張感がつきまとい、このままやっていけば自滅するように思いました。

ぼくは、いつも生活ベッタリだという批判をうけてきました。たしかに、ぼくの生活のスタイルは、ぼくにとって生活の糧である百姓仕事を重視して、理論学習には加わらなかったのですが、ここでの開拓生活を築きあげ、維持していくのにはかなりの努力が必要だとぼくは考えているし、それだけの覚悟で、ひとりからやりはじめたのでした。

ぼくが、ここでの百姓生活をはじめたとき、大学闘争の反省として、生活をおろそかにしては長続きしないということや、まただれかが、リーダーシップをとって指導するという運動ではダメだということを自分に言いきかせました。従って、いかに立派にみえる理論を提出され、それを信頼してその運動に参加せよといわれても、生活が維持できるという、はっきりとした見通しを現実の生活スタイルの中で示してもらわないかぎり、自分の身がわいさから、そんな運動を信用するよりは、一人で餓死を覚悟で苦労した方がよいと考えたのです。

生活の面で、女——子供——老人の問題について、具体的なこととして、ほとんど扱われていなかったことも気にかかりました。メンバーのひとりは、「女の人がはいってきたら、ここの共同体はつぶれるから、女の人はいれたくない」と語ったこともありました。こうした問題を切り捨てて、若い男ばかりが共同生活をやってみたところで、一時的なことで終ってしまうのではないでしょうか。

百人委員会の運動スタイルについて、ぼくが感じたのは、その無責任性となれあいでした。たとえば、三月のワークキャンプには、キャンプ実行委なるものがあったはずなのですが、キャンプを反省して、実行委のメンバーは、誰々なのか、と問うた時、結局あいまいなまま実行委の名前を使っていたことがわかり、腹を立てたものでした。またカンパのことにしても、最初、トラックと耕運機の購入カンパとして呼びかけたはずのカンパが、いつのまにか、百人委の活動費や、ここでの

生活費にまで使われていました。

百人委の人たちとは、一応六月末まで同居していくことになっています。別々に歩みはじめたあとで感じているのは、これら共同体志願者の人たちに、自分の闘いをひとりから、ひとりでもやりはじめるという気持はなくて、だれかの下積みの上に、自分たちの解放区を作ろうとしているのではないかということです。

共同体を百人委の唱えるように社会変革の武器としていこうとするのなら、なぜ、ちっぽけな共同生活にこだわるのか、ぼくにはわからないのです。現在のように管理されている状況を変えていくためには、まずひとりの立場にたって、それぞれが自分の立場から、何かをやりはじめていくことが大切なのではないかと思うのです。また、動きはじめることによってはじめて、人と人との新しい結びつきもできていくと思うのです。

ぼくはこんどの事態で、ぼく自身の自己保身のいやらしさと、生活や運動の現実的なやり方について深く考えさせられました。これから、ぼくはここで再び、ひとりになって、百姓をやっていくわけですが、これらの点を教訓として、生かしていこうと思います。

具体的には述べられないのですが、生活を軽視して運動を語るのではなく、生活しているその地点から、ぼくの場合、鍬をもって耕やしている汗の中からいろんな人たちと交流し、生活のやり方そのものによって、他の人たちと刺激を交換しあいたいと思うのです。そこには「共同体運動」の視点はないかもしれませんが、百人委の人たちとも、いっしょにやれることがあれば、ぼくなりに努力したいと考えています。

共同体情報・6

ひとつの試みの終わりはより確かな、より厳しい出発によって、われわれのめざす創造を導く

友田　肇
大阪市東成区玉津東成玉津郵便局留　備北百人委員会

1

われわれが昭和四六年三月から、備北を中心として展開してきた共同体運動が、昭和四七年五月の連休キャンプをもって備北の地を離れねばならなくなったことを報告せねばならないことは、非常に残念である。備北の地を離れるといっても、われわれの共同体運動が終わったわけではない。備北の地に育った共同体運動の種子は遠く中国山脈をまたぎ、この夏から島根県那賀郡弥栄村で、新らたな芽を出そうとしている。備北の地で展開された共同体運動を〈第一次備北共同体運動〉と呼ぶとすると、われわれは今や〈第二次備北共同体運動〉のスタートラインに立っている。この新しく展開されんとしている〈第二次備北共同体運動〉が、〈第一次備北共同体運動〉の正と負のすべての遺産をひきついだものであるかぎり、今、ここで〈第一次備北共同体運動〉が何であったのか、何故に終わりを告げねばならなかったのかを、仮借なく総括することが〈第二次備北共同体運動〉の成功的な発展を獲得するための必要事であろう。

ただ、許された紙面の関係で、われわれが備北だより五号で論及した総括のすべてを紹介することはできないため、それは次回にゆずり、ここでは備北のことを心において下さっている共同体志願者の仲間たちに、簡単な報告と、備北を離れるにあたってのわれわれの考えを述べておきたい。

●〈第一次備北共同体運動〉が、結果として今井真治君一人が、共同体運動からぬけるという形になったため、問題点をあげようとすると、不本意ながら今井君個人との意見のちがいを述べることになってしまいがちだが、それはこの報告の意図では全くないので、そのように読んでもらいたい。

2

右に明らかなように、今井君個人が共同体運動をぬけるということによって、われわれが備北の地を離れることになった、なによりも最大の原因は、共同体の土地所有の問題であった。この問題をはぐらかしては、〈第一次備北共同体運動〉を十分に総括することはできない。

備北の土地は共同体を宣言する前も後も厳然として、今井真治君個人の私有地以外の何ものでもなかった。備北との関わりの当初、「土地の名義人が誰であろうと、こだわらない」という今井君自身の言葉でわれわれがその地点をいかにも甘く通りすぎてしまったことをまず反省せねばならないだろう。その問題の重要性に気づいて、共同体としてその土地を買いもどそうとしたとき、それはもう不可能だった。

ヤマギシ会では、自分の私有地、私有財産を提出して共同体をつくりたいという人がいても、もとの所有者がそのままその土地に残って、そのかつての私有財産を使用して共同体をつくることは認めないらしい。われわれの共同体においても、それほど厳しくなくても、完全に自由な土地、徹底的に解放された土地であって初めて、共同体が可能であるという点ではヤマギシ会のそれとかわりがない。

残念ながら備北の土地に関するかぎり、われわれの共有感が実に不十分で不安定なものであったことが暴露されたことになった。共有感というのがしばしば感情レベルの問題に解消されてしまいやすいものであるとすると、不動の共同体運動を展開するには、最低の物質条件としての共同体地だけでも、資本主義的陰影のひとつである私有を完全にふりきったものでなければならないというのが、〈第一次備北共同体運動〉から得た最大の教訓の一つである。われわれはこの教訓から、つぎの新しい共同体を一坪運動のような形で共有する運動をはじめている。

所有の問題に関しては、この共同体地の所有の問題の他にも、作業分担から発展した生産手段の所有〈野菜を作る者がそこからの収益をすべて所有する、他の者はその生産手段である畑に触れることはできない〉とか、共同体内の低額の小遣い支給や、アルバイトの一定パーセントの私有を認めるというような部分的共同体の無私有性の否定とも思われる考えが今井君の方から提示された。これらが

本質的に土地私有の問題と関わっており、共同体運動とは相入れないものであることは明白である。

3

本質的に人間の能力・知識・体力・財力には個人差があるものである。その個人差がそのまま権力関係を構成しているのが、資本主義社会（官僚的共産主義社会も同じだが）である。われわれのめざす共同体社会では、それぞれの能力が集団の力として生かされなければならないのであって、能力のあるものだけが自立した個人といって、その方面の能力が不十分なものに対して、つきはなしたり閉鎖的な態度をとることは、共同体を内部的に崩壊に導くものである。

『月刊キブツ』四月号で今井君が指摘した「個人に負担になる運動（集団）」は、もちろんわれわれの目的とするものではない。しかし、共同体が追及しているものがあくまでも「集団」であるということ、個人の負担になる集団ではなく、個人を生かしえる「集団」であることを、決定的な重さで確認しておかなければならない。

われわれは今一度、「自立した個人」というものの内実を共同体運動との関係で徹底的に問い直してみる必要がある。われわれは「自立した個人」という名のもとに、不可侵な私的領域をしばしばつくってきたのではないだろうか。その瞬間、「個人」は「私人」にかわり、自己保身と自己権力の増殖（英雄主義）を堅持するようになる。集団が弱者のなれ合いに堕してはならないように、「自立した個人」主義が英雄主義に堕してしまってはならない。

共同体運動にとっての個人は、あくまでも類的存在としての個人が問題であって、その視点が共同体思想の本質的要素であり、新しい人間関係のメルクマールとならなければならない。すなわち具体的には、農業技術をもったものともっていないものが、如何にいっしょに集団を構成し得るのか、個人的欲求が集団の中で如何に存在権を得られるのか、自立的個人が集団の自立に如何に関われるか、集団的もたれ合いを個人に拡散するものでなく、集団として如何に克服できるかという問題が、〈第一次備北共同体運動〉の過程で実にアクチュアルに提起されたものである。

この「共同体にとっての個人」の問題は〈第一次備北共同体運動〉に限られたことではない。むしろ、それそのものの追及がわれわれの備北共同体運動自身であるとしてとらえ、〈第二次備北共同体運動〉〈第三次…〉を通じて徹底的に模索していかなければならない。

4

資本主義社会と同様、共同体にとってもその存続の基盤が「生活」であることは、いかに重要視してもしすぎることはない。しかしその反面、われわれが資本主義社会における生活から脱皮し、共同体社会の生活形態を求めていこうとするのも、資本主義社会における生活のあり方に起因している。そしてまた、問題とするのは、生活ではなくてそのあり方である。この資本主義社会の中で理想的な生活形態をつくろうとするには、必然的にある種の無理がつきまとうことは避けられない。すなわち、生活を経済的自立とか生産性としてのみ考える時、共同体における生産性は、人間疎外を考えない資本主義のそれに圧倒されやすい。資本主義的生産様式・生活様式に対して共同体的それでいかに生活を成りたたせるかが、この資本主義社会においてわれわれが共同体を追及することの意味である。

われわれが、細心の注意を払わなければならないのは、生活を重要視するあまり、その生活のあり様を省みず、実質的に資本主義社会とまるでかわらない生産様式・生活様式に堕してしまうことである。すなわち生活という言葉を金科玉条のごとく振りまわすことによって、不本意にもわれわれの理想を第一歩でも妥協させたなら、その瞬間、われわれの永遠の後退が始まるだろう。

また、現代の状況においてわれわれが一つの共同体を作ろうとすれば、それはわれわれが好むと好まざるとにかかわらず、この資本主義社会から突出した部分にならざるを得ない。それに単にわれわれが共同体を数量的にふやすことを共同体運動と考えたり、また、それによって日本の地図を共同体色にぬりつぶすことを、共同体運動と考えたりしていないかぎり、われわれのめざす共同体は、あらゆる社会運動・反体制運動とむすびつく、ある種の拠点、或いは道場として位置づけなければならない。それは、共同体に住むことだけが共同体運動であるかのような考えに、批判的であるわれわれにとって当然のことである。その意味でわれわれは永遠にデラシネ（根無し草）であるのかもしれない。しかし、戦いの中においてのみ真の生活（根づき）への契機を持ち得るのである。

現実主義の衣をきて生活至上主義をふり回す時、彼らはきっというだろう。「生活に余裕ができたら運動しましょう」「十分に生産性があがれば運動しましょう」と。では彼らに聞きたい。「それは、いつやってくるのか」「だれが、それを決めるのか」。ただ言えることは、我々はすでに、この資本主義社会に「ノー」と言った。もうもどることはできないのだ。

最後に、今回のような意見のくいちがいを感情レベルのものに終わらせてしまうことなく、お互いに理論的に総括することによって、創造的に運動を発展させる契機にしたい。また、今後もこの総括に何度も立ちもどって、運動を検証していきたい。

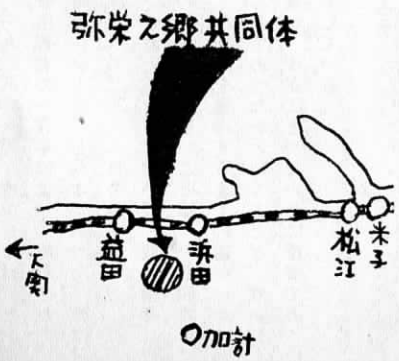
●詳しい〈第一次備北共同体運動〉の経過報告、連休キャンプのミーティング紹介、全般的総括は「備北だより」五号に掲載していますので、

〔大阪市東成区玉津二丁目東成玉津郵便局留　備北百人委員会〕まで、連絡下さい。

●備北百人委員会の新しい土地決定

住所　島根県那賀郡弥栄村大字三里八三八

行き方　山陰本線浜田駅下車。駅より広電バス安城行弥栄村役場前下車。徒歩二時間。



●先発隊は七月一日から弥栄の郷での定住をはじめます。